

第3章 レインボーロコモティブ

戻ってきた土曜日の午後

「ほんとうにまだ土曜日なのかな？」

3人はフレンズワールドから帰ってきました。雑木林を出て、もと来た道を歩いて帰ります。

「あの人に聞いてみよう、トミー、あんた聞いてみてよ」

「わ、わかったよ、バーバラ。・・・あのう・・・すみませんが、今日は何曜日ですか？」

「何曜日かって、今日は土曜だろうよ。学校は休みなんだろう？」

「で、ですよ。・・・ほら、バーバラ、やっぱ、土曜だって」

「まだお陽様も空高くにあるよ。おいらたち、だってお昼ご飯を食べたところで、あの子たちに会ったんだもんね、エイミー」

「バーバラ、ほっぺをつねってあげる」



「い、痛いわよ、エイミー！いつもそれするのやめてくれる？」

「やっぱり夢じゃないよね」

「ったくう～～」

「だって3人とも同じ夢を見るわけじゃないじゃないか。バーバラは女神様にされたんだぜ」

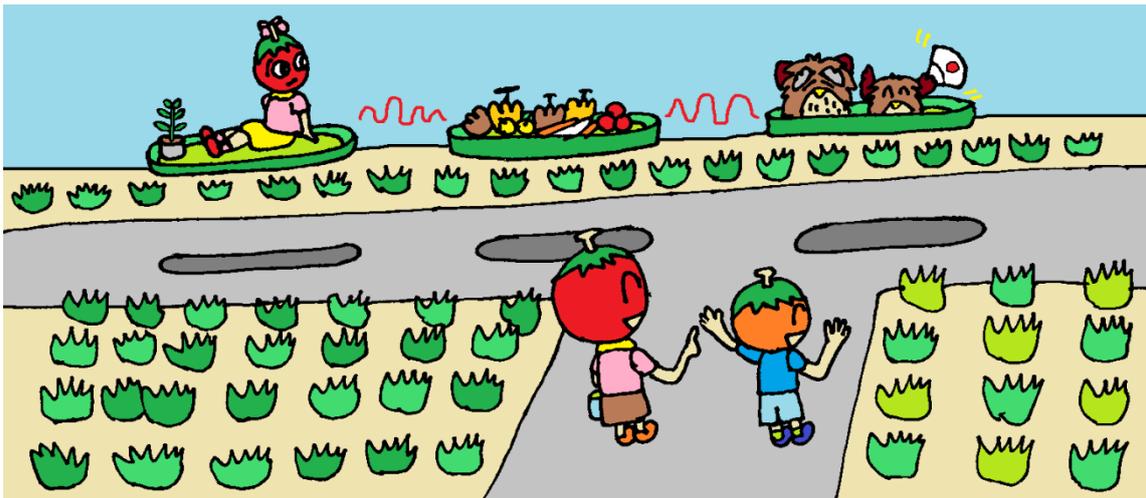
「そうよね。レタ君のうその予言でね」

「くんっていってるけど、彼は300歳だぜ。おじいさん以上だ」

「でもさ、おいらたちフレンズの国で1泊してきたんだよね」

「タートル船で1泊したわね、バーバラ」

「ハスの葉っぱがういていたよね、エイミー」



「その葉っぱに乗って行ったんだよね、エイミー、バーバラ」

「最後スカイブルー隊長はおいらたち4人を乗せて重たかったよね」

レタと帰る3人をスカイブルー隊長が背中に乗せ、トナトン王国からレタチン連邦に戻り、そのまま次元トンネルを通過して雑木林までひとつ飛びして帰ってきたのでした。3人はほどなくエイミーの家に分かれる三又（みつまた）の分岐点に来ました。

「それじゃ、エイミー、今日のことは秘密だけど、おいらの口は堅いぜ、こればっかしはね」

「あんたの口の堅さはフレンズワールドでも証明されたから、もういいわ。じゃあね、エイミー」

「さよなら、バーバラ、トミー」

バーバラとトミーはエイミーとは反対の道に分かれ、この先のマロン村の街中を通してそれぞれの自分の家に帰っていきます。

「ばあ、ただいま」

「おや、エイミー、今日は早いね。まだお昼を少し過ぎたところだよ。もうバーバラたちも帰っていったのかい？」

「うん、今日は少し疲れたわ」

エイミーはそうやって自分の部屋にはいりベッドに横になりました。

【朝に採った植物が役に立つなんて】



エイミーたち3人が採集した雑木林のコケや葉はフレンズワールドのレタチン連邦に置いてきました。

『これ雑木林のコケや草だね。これを分析すればエネルギーの状況がよくわかるよね。これをもらってもいいかな。オラッチ、ほんとうはこれを採りにいったんだ。トナとデコがオラッチの予言で街に女神を捜しに行ったから、あわてていて採集できなかったから助かったニ』

レタはこの葉や草を持ち帰って調査するそうです。レタチン連邦は科学の進んだ国と聞きます。それはどのように調べられていくのでしょうか。興味ありますが、また後でわかってくるはずです。そして最後にスカイブルー隊長に乗るときにトナが3人にいいました。

『バーバラは春。春は色（彩）のエネルギー。エイミーは夏。夏は音（楽）のエネルギー。トミーは秋の知（識）のエネルギー。それを忘れないでね。そしてそれが冬になるとわたしたちの生命に必要なものだから』

『エイミーとトミーにもバーバラの王冠と同じものをあげるわ。そしてこの木は3人のベッドの横か机の上にでも置いて頂戴ポン』

そう言ってデコは小さな鉢に植えられた小さな木を3人に渡しました。そうしてトナがそれぞれにまた別のものを渡しました。

『バーバラの春の色にはこれを、エイミーの夏の音にはこれを、トミーの秋の知にはこれよ』

【いったいこれって何？】

エイミーはベッドに横になり、王冠を机の上に、小さな木をベッドの横の棚に置き、オカリナのような笛を見てつぶやきました。



「あたいに笛を吹けてこと？じゃあ吹いてみようか？」

そうって指を適当にあて唇から息を出してみました。

「すーっ」

息の音はすれども笛から音は出ません。

「あれ、おかしいな？もう一度やってみよう」

「すーっ」

やはり息の音はすれども笛から音は出ません。何度やっても同じです。最後は飽きてしまったので、机の上に置くと知らないうちに眠ってしまいました。

「ただいま」

「あら、バーバラ、もう帰ってきたの。まだお昼過ぎよ。どうしたの」

お母さんのスージーがお昼ご飯をかたづけながらいいました。

「これお弁当箱と残り物よ」

「あらー、きれいに全部食べたんじゃない」

実はお弁当の残りも全部フレンズの国に置いてきたのです。それも研究のためにあった方が良くということだったのです。

「何を持ってるの？」

「これは筆だよ。もらったのよ」



「そう。じゃあまた素敵な絵でも描いて頂戴」

そうってバーバラの持ち物にはあまり興味を示さないまま、急いであとかたづけをしています。バーバラは花の王冠と小さな木の入ったリュックサックと1本の筆を手に持って部屋に戻ってきました。机の上に座りスケッチブックを広げました。

【どうやって描くのかな？】

見たところ30cmくらいの長さの筆は東洋の国の筆のようであり、その毛先の幅は1cmほど、毛先の長さは3cmほどあるようです。机の引き出しから絵の具を取り出し、赤色をパレットに少し出し、筆をつけてみました。

「絵の具がつかないわね」

バーバラがその赤色の絵の具に筆先をつけるのですが、色がのりません。筆を水につけ再度濡らしてから、またパレットの赤色の絵の具に触っても絵の具は水に溶けるのですが、筆には色が付きません。

「なんなんだ、この筆は？」

そうってバーバラはそのまま筆をパレットにおいて、ベッドに横になりました。

「なんだか眠くなってきちゃったわね」

トミーは家に帰る途中の公園でベンチに座りながら、もらった辞書のような手帳より少し大きいその本をリュックサックから出し、広げて読もうとしました。そこへ男友達が3人やってきました。

「やぁトミー、ひとりで勉強でもするの？」



「そうじゃないんだけど、本をもらったから読もうと思ってさ」

「トミーが勉強したら世の中がひっくり返っちゃうよ。アハハハハ、そういうボクもだけどね、トミー？」

「なんだこれ、真っ白で何も書いてないや」

別の友だちもいいました。その本は開いても何も書いてありませんでした。

「なあんだ、これをどうしようっていうのかな。まあいいや何かのメモ帳に使えばいいや」

トミーはそうやってその本を、草の王冠と小さな木を入れた所とは別のリュックサックのポケットに入れました。

「何も書いてない本はノートになるから便利でいいかもね。日記にすればいいんじゃないの？」

「そ、そうだな。おいら、日記帳がほしかったから、帰ったら日記帳にするよ」

「じゃあ、トミーも一緒に遊びに行こうよ。魚を採りに行こうかって言っていたんだ」

「今日はもう疲れたから家に帰るよ」

「えっ、トミーがお昼過ぎにもう疲れちゃうの？」

「まあ今日はいろいろあったからね。もう1泊もしちゃったし・・・」

「いっばくって何？」

「あ、いや、いっぷくの間違いだよ。今日は帰るよ」

「そう、じゃあまたね」

そうって友だちとも分かれ、自分の家に帰って行きました。

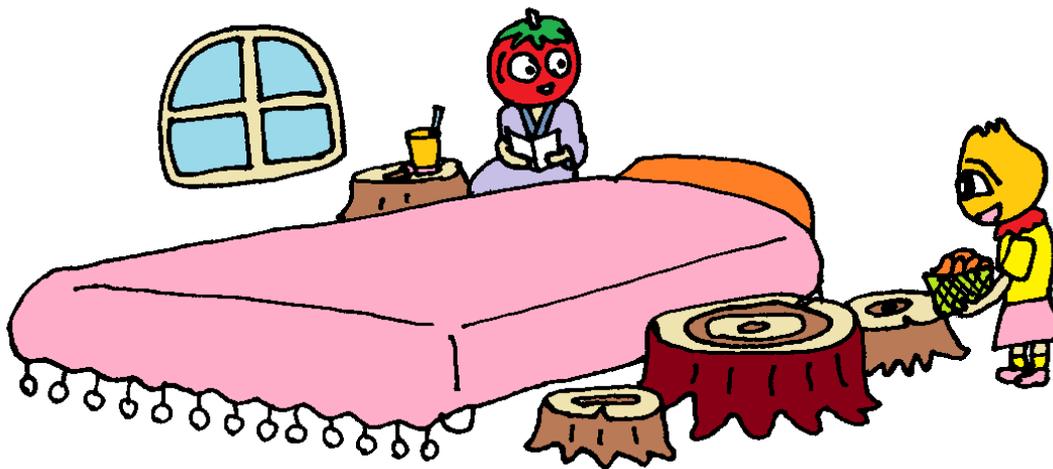
【春は色（彩）のエネルギー。夏は音（楽）のエネルギー。秋は知（識）のエネルギー。そして冬は生（命）のエネルギーって？】 トミーも何も書いてない本を枕元に置き、いつしか眠りについていました。

トナの病気

まだ土曜の夕方にもなりません。疲れて眠ったエイミーはさっきまでいたフレンズのワールドの夢を見ました。

『あらもう帰ったんじゃないかトナ？』

「あら、そうね。さっきレタ君に送ってもらって帰ったはずなのに、またここにいるの？」



エイミーは先ほど帰った自分の部屋ではなく、トナの部屋でベッドのわきの椅子に座っているトナを見ていました」

そこへデコがはいつてきました。

『あらエイミーも来ていたポン？トナ、起きていてだいじょうぶなの？』

デコが椅子に座っているトナにいいました。

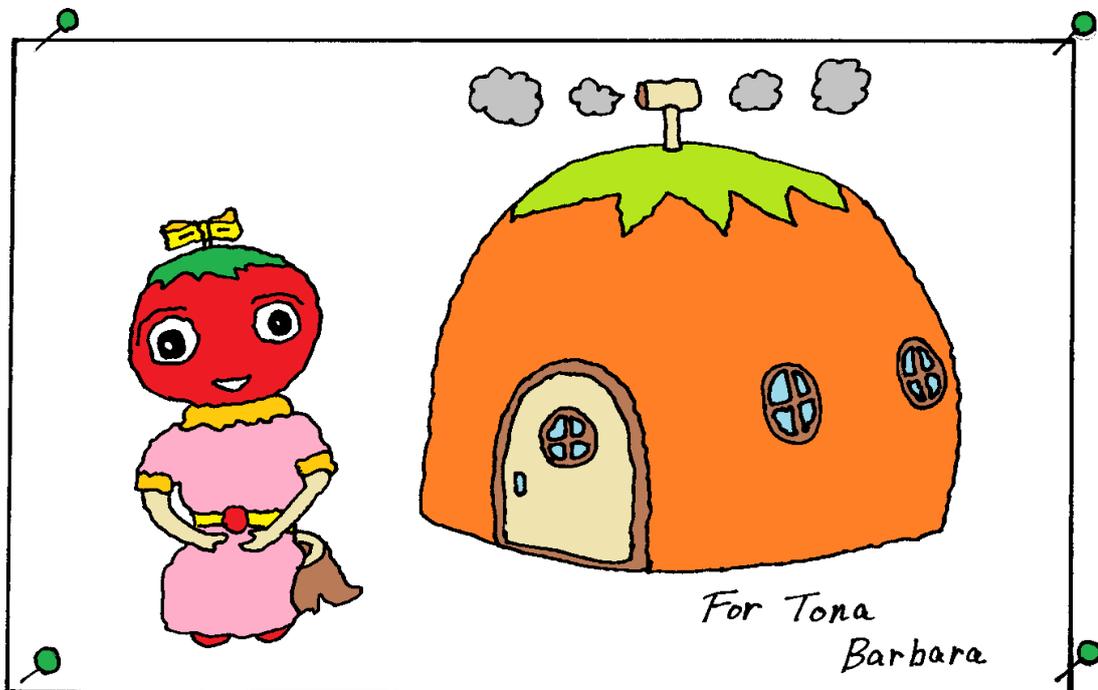
『エイミーやみんなが来たから元気になっていたけど、やっぱ少しおかしいわね。ほらオレンシアの皮をいっぱい持ってきたポン。これを枕元に置くといいのよ。エネルギーの吸収がよくなるポン』

『デコ、ありがとう』

「トナさん、調子がよくないの？」

『そうなの。昨日あなたたちが来る前からおかしいのよ。少し横になるトナ』

トナはそういって椅子から離れ、不思議な雑木林でも見た光るコケのような植物のベッドの上に横になりました。



「トナさんの絵かしら」

エイミーは気がつかなかった自分の後ろの壁に飾ってある絵に振り向いていました。

『エイミーの知っている人が描いたトナ』

トナがベッドに横になっていました。

「知ってる人？だれかな？でも下手な絵ねえ、これって……。あっ、ご、ごめん」

『いいのよ、でもこの絵のおかげでトナは少し元気が出てきたポン』

デコがいました。

「で、この絵、だれの絵なの？」

『バーバラがさっき描いたポン』

「ここにいるの？」

『もう帰って行ったポン』



デコの説明にエイミーは少しぼかんとしていました。バーバラが絵を描いたのなら、自分は音の役割だと気づきました。

「あたいは夏の音のエネルギーだったわね。笛を吹いてあげる」

そうって左手に持っていたオカリナのような笛を唇に当てました。笛は吹けないはずのエイミーでしたが……。

【あら、そういえば、なんで吹けるのかしら……？】

エイミーは結構上手に吹いています。マロン村の音楽好きな青年が作曲した【愛する夏の日】という歌を演奏しました。彼のギターに合わせ何度も一緒にリコーダーで吹いていたからです。

『すごく素敵な曲だったわ。波の音がここまで聞こえてきたわよ』

「ありがとう、トナさん。はやくよくなってね」

『でもトナ、少し顔色が良くなったわね。今、このようにエネルギー吸収ができない病気がトナトンでは流行っているのよ』

「そうだったんだ」

エイミーはデコの顔を見ていました。

『今はまず春の色とこれから来る夏の音をいっぱい吸収しないとイケないときなのよ。それなのにこんな変なお天気になってしまって、特にこのトナトンでの影響が大きいみたいポン』

『だからエイミー、もっとお歌を聞かせて欲しいトナ』

「そうなんだよ」

そこへレタと一緒にトミーが入ってきました。

「なによ、あんたもこっちにいたの？なに？そのメガネ！」

「なにか知らないけど、おいらさっきバーバラが絵を描くところを助けたんだぜ。バーバラは筆の使い方をデコさんとレタ君から教わっていたんだ」

「であんたはなに助けたの？」

「がんばれ、がんばれって、いったただけだよ」

「そのメガネは？」



「頭がよくなったように見えるだろ？だっておいらも勉強しないとね。この本は勉強すると字が増えるんだってさ。今は真っ白なんだ。ボクのエネルギーは秋だから夏までに字でいっぱいにならないとね」

『でもほら少し顔色が良くなってきたよ。やっぱりオレッチの言うとおりでな。バーバラもエイミーも女神なんだニ』

「おいらは？」

『もちろん、もうじきヒーローだよ。もっと勉強すればニ・・・』

「わ、わかったよ・・・」

『それでもこうしてみんなにやってもらうには時間がかかりすぎるんだニ。王国ではもう動けなくなっているフレンズが相当多くいるんだニ』

「そうだよ。ぐずぐずしてられないよ。レタ君、さあ行こうよ。会議にはボクも参加するよ。秋の知のエネルギーの勇者としてね」

「知の勇者ねえ・・・？」

『じゃあね、トナ、早く良くなってね。デコもありがとうニ』



こういってレタとトミーはトナの部屋を出て行きました。

「エイミーごはんよ」

エイミーはアンおばあさんの声に、夢から覚めました。

【おかしい夢を見たわね】

エイミーは夜になって目を覚ましました。

【笛はここにあるし、王冠も小さな木もあるし。フレンズワールドに行ったってことは夢じゃないのね】

エイミーはその笛を持って食卓に座りました。

「おや、その笛はどうしたんだい？」

食卓に置いた笛を見たアンおばあさんがたずねました。

「友だちにもらったんだよ」

「おや、だれにだい？」

「新しい友だちだよ。トナっていう名前だよ。あとデコとレタ君もいるよ」

「おやおやそうかい。少し変わった名前だけど、それはよかったねえ。それで吹けるのかい？」

「さっき吹いたよ。ほらこうして・・・」

エイミーはその笛を唇に当てて息をしますが音が出ません。またやってみますが同じです。

「スーソー」

やっぱり音は出ません。

「ははは、もういいよ。また練習して聞かせておくれ」

「おかしいなあ。さっききちんと鳴ったのになあ」

エイミーは笛をまた食卓の上に置き、スプーンでスープを飲み始めました。採りたてのトマトで作ったトマトスープです。

「お前もやっとトマトスープが飲めるようになったわね」



アンおばあさんが少し微笑みながらいいました。

3人の同じ夢

日曜日になって3人はマロン村の街の噴水のところで会って話をしています。昨日の夢のことが発端になりました。

「昨日変な夢を見たわ。フレンズワールドに行ったら、トナさんが病気だったの。そこでお見舞いに行ってもらった笛で音楽を演奏したのよ」

エイミーがさっそく切り出しました。

「えっ？わたしも同じような夢を見たのよ。もらった筆でトナさんの家の前で、お花畑の絵を描いたの」

「おいらの見た夢と同じだよ、バーバラがトナさんの見舞いに行ったときに、家の外のお花畑で絵を描いていたんだ」

「そりゃあ、わたしだわ。トミーがレタ君と一緒に、わたしが絵を描いているところに来たんだわね」

3人は不思議そうな顔でお互いを見てしばらく黙ってしまいました。

「・・・でも、あたいはバーバラには会わなかったわよ。もう出て行った後だって・・・」

「ひょっとしてその後でおいらに会わなかったかい？」

「会ったわよ。あんたとレタさんが一緒にトナさんの部屋に入ってきたんだ」



「そ、その通りだよ。でもなんで3人とも見た夢が同じなの？」

「でもさ、エイミーは得意な音楽に笛はあってるけど、あたしは苦手な絵よ。それに頭の悪いトミーが何で知のエネルギーなのかしら？」

「いっときますが、おいらに知のエネルギーは、ぴったり合っているとと思うけどね」

トミーはバーバラに舌を出していいました。

「それもそうだけど向こうでは笛がふけるけど、こっちでは音も出ないのね。なんでだろう？」

「あたしもよ、エイミー。こっちでは絵の具に色が付かないけど、あっちでは思っただけでいろいろな色が筆に出てくるのよ」

「それはおいらも昨日の夢で見たよ。バーバラが1本の筆を目の前で見ただけで色が変わって行くんだ。すごえと思ったよ」

「エイミー、今その笛持ってたら吹いてみてよ」

「バーバラ、いいわよ」

とってエイミーは笛をポシェットから取り出し唇に当てました。

「スー、スー・・・ほら、やっぱり音が出ないわね」

「おいらのこの本も真っ白だしね」



トミーもそうやってポケットから辞書のような本を取り出して広げました。

「あれっ、今度は何か書いてあるぞ」

びっくりしてはじめてのページを読んでみると、昨日の夢の様子が書いてありました。

「あんたが書いたの？」

バーバラが聞きました。

「書ける訳ないじゃん。しかも活字だよ。どうやって書くんだよ？」

「ますますおかしいことになってきたわね」

エイミーが腕を組んでいました。

「もうお昼だけど、ご飯を食べてからどうする。何かする？」

エイミーがたずねました。こういうときに真っ先にいうのがトミーです。

「おいら・・・」

「さすが遊びはトミーね？おいら・・・で、なにをする？」

「おいら、家で少しこの本を見て勉強しようかなと・・・」

「ええ～、トミーがお勉強するの？うそでしょう、ねえ、バーバラ」

「う、うん・・・。あたしも家で絵の勉強を使用かしら・・・」

「ふ、ふたりともどうしちゃったっていうの・・・？まあそりゃあいいけどさ、あたしも明日の宿題したいしさ・・・」



エイミー、バーバラ、トミーの3人はそれぞれの夢がなぜ同じなのか？このそれぞれがもらった笛、筆、本はいったい何をするものなのか？多くの疑問がわいてきました。

「じゃあ、また明日学校でね」

とってエイミーは街の北の方へ、バーバラとトミーは南の方へ分かれて家に帰って行きます。

エイミーは家に帰りお昼ご飯を食べ、部屋に戻ってきました。宿題をするつもりで教科書を開いてみるのですが、横に置いた笛が気になります。手にとってまた唇に当ててみました。

「スー、スー・・・」

やはり音は出ません。

「どうして音が出たんだろう？やっぱり夢の中だからかな？」

その夜は3人はまた同じ夢を見ました。その夢はトナだけでなく、雑木林まで乗せてくれたスカイブルー隊長まで調子が悪いということです。次の日の学校へ行く途中で3人は昨夜の2回目の夢のことを話していました。

「エネルギーが少なくてみんな、トナさんみたいに動けなくなってきてるよ」

エイミーが心配そうにいいました。

「トナトン王国の森や畑は灰色のように色がくすんでいるって」

バーバラも自分の見た情景を話しました。

「このままでは王国はなくなってしまうよ。なんとかしないと・・・」

トミーも声を少し大きくしていいます。

「このままではトナさんだけでなくフレンズワールドも全滅しちゃうわ」

「でも、エイミー、わたしたちだけじゃ何にもできないよ」

「おいらたちが助けてあげようよ。バーバラは女神さんなんだし」

トナトンを救え

王国では異常の原因が少しわかってきました。はじめの発生から2週間が経過しています。今までトナトン王国もレタチン連邦もオレンシア合衆国も長きに渡る平和で、特にこの3国以上の外界との接点はありませんでした。それがサーヤが見つけたレタチンからマロン村へつながる次元トンネルという道は、当初はミツバチである小さなサーヤくらいしか通ることができませんでした。それがあれやあれよという間に広がり、羽を広げると5メートルにもなるビッグドラゴンフライでも飛んで通過できるようになりました。

『それにしてもトナトンのできが悪いトナ・・・』

『ほんとうにどうしたポン』

『外からのマインドウェーブへの影響なんだよ。穴がどんどんと大きくなっているんだ。それを境に状況が悪くなっている。何かこれと関係していると思うんだニ』

レタは寝ているトナと、見舞いに来たデコを前にしていいました。

『このままではトナトンだけでなく、ワールド全体もおかしくなってしまうポン』

デコがいいました。

『どうすればいいの？』



実は彼らフレンズは自分たちのことをあまりよく知りません。彼らの歴史は1,000年もありません。1,000年以上昔のことが何も残っていないのです。自分たちがどうしてここにいるのか？どうして生まれたのか。何もわからないのです。彼らが王様になったり、彼らの国が王国や連邦、合衆国というのも、あの教科書といていた辞典に書かれていたことをやっているだけなのです。実はそれは自分たちを知るための第一歩だと思ったからなのです。

『1年前にサーヤが見つけたホールはもうスカイブルー隊長が飛べるほど大きいトンネルになったけど、満月の力を借りないといけな
いんだニ。ものすごくエネルギーを使うんだニ』

『スカイブルー隊長もへとへとだったわね、この間は』

デコが横になっているトナにいいました。不思議な森へとつながるトンネルは、単なるトンネルではないようです。

『スカイブルー隊長もヒューマンの前では、疲れていないフリしてかっこつけていたトナ』

トナも横になったままいいました。満月の夜はそのトンネルを通ることが楽ですが、満月でないその日の移動は本当は大変だったようです。しかしレタの予言した女神様が見つかったものだから、あわてて戻ってきたのです。この後中心となるフレンズが集まってきて、次の2つの主題で話し合いが行われました。

1. おかしなマインドウェーブの原因

- ・おかしなマインドウェーブが混ざっているので、エネルギーが不安定なこと。
- ・エネルギーの不安定はトナトンのでき具合に影響し不良が出ていること。
- ・そのために春なのに花も芽も咲かず、全体が灰色の世界になっていること。

2. 教科書に載っていた写真がヒューマンと似ている

- ・3国で使っている教科書にはヒューマンによく似ている人物が何人も登場している。
- ・3国に住むフレンズにとって自分たちのルーツが何かということを知りたい。

・そこにヒューマンの女神がやって来た。ヒューマンに対する興味がわいてきた。

レタチン連邦のヒューマン研究者クラウシアがいました。

『レタ、ヒューマンワールドからの悪質なマイクロ粒子流入だったとは、ボクにゃんもだれも気がつかなかったにゃ』

クラウシアはフレンズワールドの重力と地磁気が異変をおこし、それを利用するトナトンやフレンズに病気が出たというのです。マイクロの世界では、至るところで別のワールドと次元がつながっています。あまりにも小さくほとんど影響がなかったのですが、ヒューマンワールドの急激なエネルギー増大により、限界点を越えてしまったというのです。

『はやくそれを止めないと大変なことになるにゃあ』

そういうことで今、トナトン王国、オレンシア合衆国の重要フレンズもこのレタチン連邦にやってきて、ヒューマンワールドに行く準備をしています。

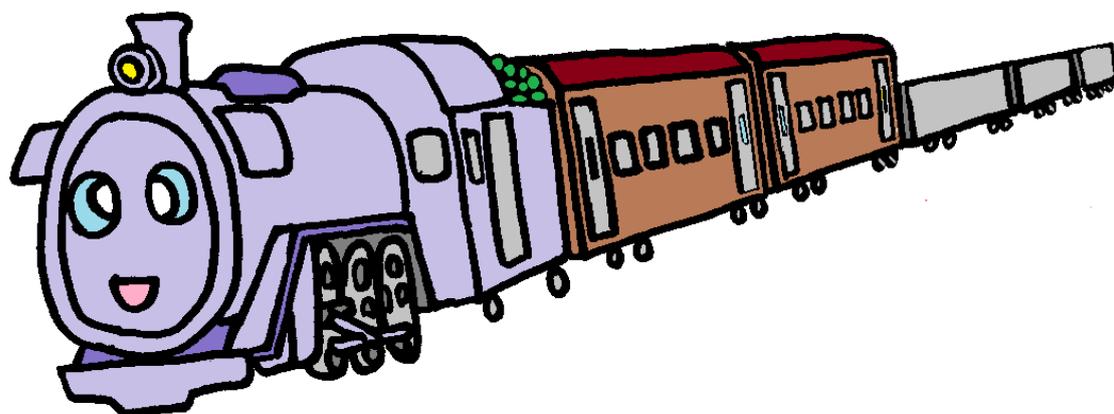
『さあ急がないとな。オラッチもデコも用意万端だ。トナ姫が治ったらすぐ出発するニ』

レタチンではこの次元トンネルと汽車の整備が、最終段階をむかえていました。この前の満月の夜フレンズが次元トンネルを通過して、ヒューマンワールドに行きました。しかしそれはアニマルズやバグズの生物の力を借りて行ったものでした。今度はフレンズワールドに長い期間滞在するため、食料となるトナトンやレタチン、オレンシアも持って行きます。またヒューマンワールドの移動のためにビッグドラゴンフライも連れて行きます。空を飛ぶことができるから

です。合わせると相当の重量です。それにはマシンである汽車を使うしかありません。汽車は大昔に誰かによって作られたと教科書にあります。それを今トンネルの前で整備しています。

『さあ、最後の仕上げだ。どんどん運んでくれよ』

作業の責任者が、がんばるように声をかけています。レタもいろいろと気になって巡回しています。



『どうかニィ？最後の調整はニ？』

レタはその責任者にたずねました。

『ちょうせい（し）いいよお〜〜〜』

『あっ、そ！』

『急いでいるよ。ブルーモスをもう少し植えないとパワーが出ないけどね。昨日やっと全部にそれを植えたところなんだ。バグズとアニマルズたちにも、随分と協力してもらったよ』

責任者は少し得意げにレタにいいました

『汽車が向こうにいる時、見つからないように林の色に変えるコケで大変だったよ。これで無事に帰ってこられるよ』

『ありがとうニ、よくがんばってくれたニィ』

レタは責任者にお礼をいいました。

『試運転するよ』

責任者は運転手に試運転の合図を送りました。

『おお～～っ』

レタは思わず声をあげてしまいました。それもそのはずです。汽車は光り輝き7色の光を放っています。

『こっ、これは・・・』

『ヒューマンワールドへは約3時間かかるよ。安全第一で整備したんだ』

『ありがとう。安全がいちばんだニ』

『大丈夫でしょう、教科書によると昔はもう何100年と使っていた技術だからね』

『トナトンを救え！』

『トナトンを救おう！』

『トナトンがんばれ！』

大合唱が始まり汽車の整備もいよいよ加速しています。

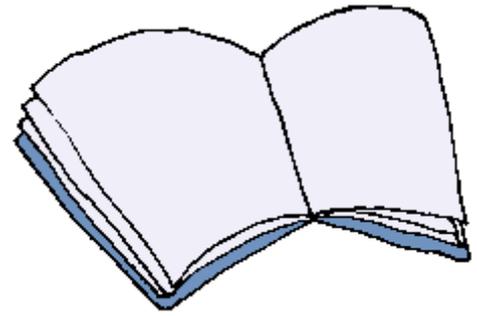
七色の汽車に乗って

3人が同じ夢を見た数日後、マロン小学校の6年のクラスで、エイミー、バーバラ、トミーの学校でのようすです。

「あれから日が経つけど、だいじょうぶかしら」

お昼休みにエイミーがそばに来たバーバラとトミーに話しかけました。

「そうなんだよね。おいらの本も夢の中で会ったことが書いてあるけど、あれからは真っ白だしね」

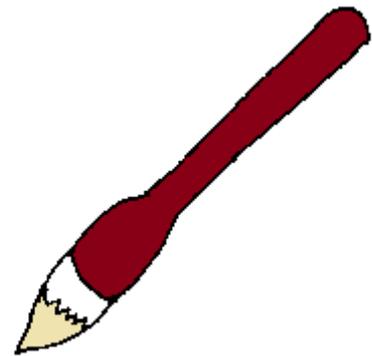


トミーはその本のはじめに夢の内容が書いてあるページを広げながらいいました。

「わたしもこの筆で何か書こうと思うのだけど、あの夢の時のようにはいかないわ。エイミーはどう？」

「あたいもちっとも音が出ないわ。ほら、スー、スー、よ」

バーバラも筆をみんなに見せ、エイミーもカバンから笛を大事に取り出し唇にあてて吹いてみました。

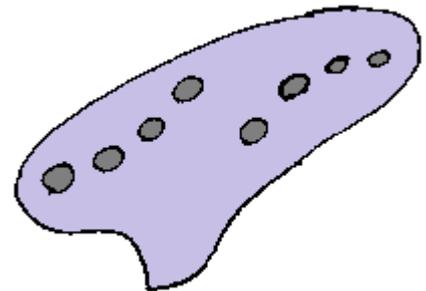


「なにも描けない筆だよ」

「わたしも音の出ない笛」

「おいらも真っ白な本」

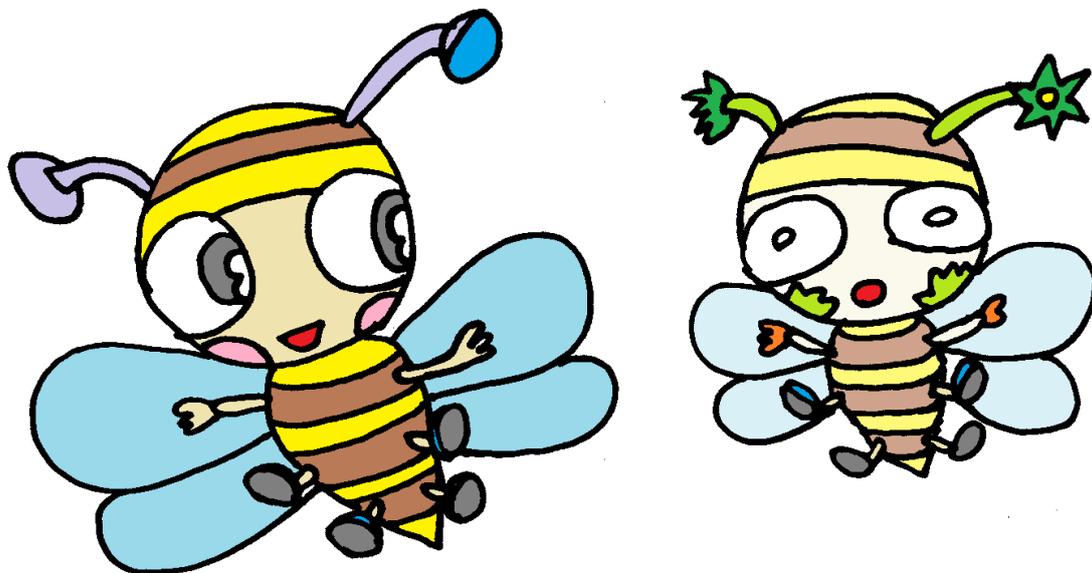
「いったい、なんで～～～」



3人は思わず一緒に大きな声を出してしまいました。周りのほかの友だちが、3人の方を見て【どうしたの?】という顔をしています。3人はため息をついて何もできませんでした。エイミーたち3人が帰ってから5日が経ったトナトンでは、ますま

す空が灰色がかってきて、葉は芽を出すものの、花をつけることがありません。すっかり荒れてしまっています。

エイミーたちは3人はその夜また同じ夢を見ました。夢はとっても



短くすぐに終わってしまいました。その夢にはミツバチのサーヤが出てきました。

『やあ、バーバラ、エイミー』

「あら、あなたはサーヤさんかしら？」

バーバラが答えました。

「よく似ているこちらの方は誰かしら？」

エイミーが聞きました。

『ボクはヤーサっていうんだ。サーヤ兄さんの弟だよ』

「ややこしいね・・・」

トミーがつぶやきました。

「で、サーヤさんが来たってことは何か伝言でもあるのね」

『さすが、おりこうさんだね、エイミーは。実はそうなんだサーヤ。今、君たちは寝ているがこれは夢ではないんだよ。僕らが君たちに話しかけているんだ。だけどエネルギーをよく使う上に今それが不安定だ。そこで今度の土曜にあの雑木林に行ってくれないか。トミーの本にミーが手紙を書いておいたサーヤ……』

そういって夢は終わってしまいました。

「手紙の夢を見たよ」

翌日の土曜日に3人は雑木林に集まって、サーヤからの手紙が書かれたトミーの本を見ました。そこにはトナトン王国の状況が書いてありました。畑は荒れ果てた灰色の世界になってしまい、まるで冬に戻ったことと、3つのお願いが書いてありました。

「10日後の満月の日に出発するのね、バーバラ、トミー」

「わたしたちの努力にかかっているのね、エイミー」

「3つのお願いの3つ目がかなったらすごいね。おいらお祝いするよ」

<3つのお願い>

- (1) 調査に協力しトナトン王国を元の姿にすること。
- (2) エイミーの笛、バーバラの筆、トミーの本に運命がかかっているの、しっかりと勉強すること。
- (3) ミー（サーヤ）のお嫁さんを捜すこと。

しっかり頼むサーヤ



10日経ちました。フレンズワールドのレタチン連邦の次元トンネルの前です。いよいよヒューマンワールドへ出発する、その日がやってきました。はじめにサーヤがこのトンネルを発見して半年が経っています。小さかったトンネルはその後どんどん大きくなり、この間の満月の日にトナ、デコとレタがそこを通過してヒューマンワールドに渡ったのでした。

そうしてエイミーたちと出会いバーバラを女神としてヒューマンワールドとのつながりができたのです。ファンファーレが響き元気を取り戻したトナ、デコにレタが続きます。汽車もまた満月のエネルギーを使います。次の満月までおよそ1ヶ月（実際は29日）の滞在になります。その間にヒューマンワールドで調査と対策をしなければなりません。

『ここにおられる皆さん、本日いよいよヒューマンワールドへのお発の時がやってきました。ここにその3人の勇士を紹介します』

みなは切り株や木の上から汽車の出発の様子を見えています。

『さあ、いよいよ出発だよ。スカイブルー隊長も乗ったのかな？』

レタが辺りを見回していいました。

『ほら、ここに乗っているよ〜〜〜』

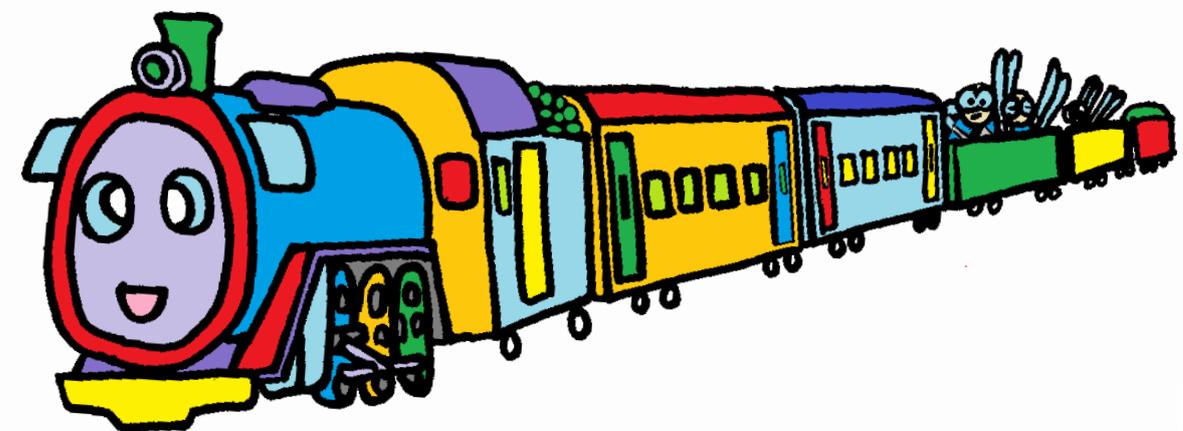
スカイブルー隊長とブルーシルバー隊員も後ろの貨車から羽を振ってみなに答えています。フレンズではオレンシアの秘密兵器の使い手のレモンズ姉弟もいます。サーヤとヤーサのミツバチ兄弟も一緒に行きます。調査のためのいろいろな材料が貨車には積まれています。

『それでは出発します。皆さん少し離れて欲しい二』

『ボクにゃんも行くので4人の勇士にゃのら』

クラウシア研究員がいました。

レタの声で整備のフレンズの面々も汽車の周りから数メートル離れました。



『それでは、行ってきまあ～～す』

トナ、デコの2人も1つの窓から、レタはデッキの扉を開いたまま、手を振っています。今まで光っていなかった汽車は、出発の汽笛と共に七色の光をリズムよく点滅させました。そして、ゆっくりと50メートルほど先の少し大きく広げた次元トンネルへ、加速して行きます。

『気をつけてえ～～～』

もう声は聞こえません。汽車は次元トンネルに入り、ますます速度を上げて行きます。これからヒューマニーワールドへの調査の旅の始まりです。



クラウシア研究員